

ベルギーの幼児教育

ベルギーの主都ブラッセルは、ヨーロッパ・コモンマーケットの中心地として、さらにNATOの根拠地として、現在、急速な発展の途上にあります。町にたちならぶ高層建築は、ほとんど全てとわいていほほどく最近に建てられたもので、また、さらに次々と新しいビルディングが建築中で、ちょうどオリピック直前の東京を思わせるような混雑ぶりです。

八世紀に発生したと思われているこのブラッセルは、実際には十九のコミューン(町)にわかれています。これはブラッセルが歴史的には、いくつかの接近した村が次第に発達

足立寿美

して一つの都市となった事実を物語るもので、大都市となった現在も各コミューンはそれぞれの市長・警察・消防署・学校組織を持ち、完全に独立した行政機構のもとに統治されています。

この十九のコミューンの一つ、イクセルに住んでいる私は、ある日、幼児教育の実状を知る手がかりを求めて、メゾン・コミュニナル(市庁)を訪ねました。一つ二つ、幼稚園を紹介してほしい旨、係の人に話しましたら、市長さんが直接会って説明して下さるとのことで、ヤンセン市長からお話をうかがいました。

一 ベルギーにおける教育機構

この国の幼児教育の正しい理解のためには、やはり教育というもの全体の検討が必要と思われまますので、まず最初に大まかにその組織を位置づけてみましょう。

義務教育は六歳から十二歳までの六年間で、これはそのまま日本の小学校にあたるようです。この間の費用は一切コミュニティでまかなわれているとのこと。六歳以前は、二歳と三歳児を対象としたものと、ジャルダン・ダアンファン (des jardins d'enfants) といわゆる幼稚園とがあります。これは後で詳しく述べましょう。

日本と大きい差のみられるのは義務教育以後、つまり十二歳以後の教育機構で、ここで明らかに大学進学を目的とするグループとその他の職業技術学校にすすむものとわかれます。前者は十歳までリセにすすみ、後者はエ、コ、ル、ハ、ル、マル、あるいはエ、コ、ル、テ、ク、ニ、ク、に進学します。

十二歳ではつきり将来の方向が定められるものかどうかは、おそらく誰でも疑ってみると思えますが、この点はベルギーでも問題となり、一九五二年あるいは五三年頃から、リセ以外の学校からも大学進学が可能なるように規則が変化されました。もっとも、ベルギーの大学は、入学は簡単ですが、落第しないで、一年から二年へ、二年から三年へとすすむことは、かなり難事ということですからリセのように大学進学（大学入試でなく）を目的として教育をうけたものと、一定の職業訓練を中心としたカリキュラムに従ったものとの間の学力の差は、かなり大きいものと思われる。従つてリセ以外の道から大学に入学したとしても、これ

を卒業するのは、大事業のようです。ちなみに小学校・幼稚園の教師は、大学非進学組です。もちろんすでに述べましたように、教師の免状をとった後も大学進学は規則上可能となっています。

このようにリセだけでなく、その他からも大学進学の道が規則としてひらかれているとはいへ、十二歳で大体の将来の方向が決定するといつて間違いないでしょう。将来先生になろうと思つるのは、すでに小学校六年の時にそう決心しているわけです。もちろんこの十二歳における将来の選択には親の意志、希望が大きい影響を持っていることは疑えませんが、ついこの間も私がフランス語を習っている学校で、テープ・レコーダーその他の機械を担当している人が、九月以後からとてもかわいひ男の子を学校に連れてきて毎日一緒に働いているのに気付きました。話にきくとその人の子どもだそう、年はおそらく小学校を卒業したばかりのようでした。この場合にみられるように親が自分の仕事を子どもに引き継がせることは多いようです。

町を歩いていてもよく背伸びをして郵便箱に手紙をくばっている男の子をみかけます。ちゃんと薄鼠色の制服と制帽をつけていますから、公式に郵便局につとめているのに、まちがいなきさうですが、いかにも手紙のたくさん入った皮のカバンは重さうです。加えてこの国の子どもの体格はとびぬけていい方というわけ

ではありませんから、幼さが一層目立ちます。

このように十二歳から子どもは家計の供給者となり得る状況です。大学に進学するのは中産階級に限られているようです。大学自体の費用は労働階級に無理すれば出せない額ではないのですが、この人たちにとって十二歳から子どもが外で働く場合と、大学卒業まで親の側で経費を払う場合の差は著しく、その結果大学進学は大層困難なことのようにです。加うるに大学を卒業できたとしても、就職の際はコネが力を持つ社会ですから、どんな無理をしても子どもだけは是非大学まで出したい、式の親は少ないようです。こうした点を反映してでしょうか、毎年冬にあるブラッセル自由大学の大学祭では、大学生と町の若い労働者との喧嘩がつきものになっています。

二 言葉と教育

ベルギーの教育状況に関して忘れてならないのは言葉の問題でしょう。知っている人も多いと思いますが、ベルギー国は北部のフレミッシュ（オランダ語と類似した言葉）をしゃべる人たちと、南部のフランス語をしゃべるワルーンと呼ばれるグループの二つにわかれています。歴史的にはワルーンが支配権を長く握って来ており、フレミッシュは召使の言葉とうけとめられていたこともさ

ほど昔のことではないのです。従って、フレミッシュ系の人は将来のために子どもの時からフランス語をならう努力を払う人が多く、両国語を自由に使えるのはまれでありませんが、ワルーンの中でフレミッシュを喋る人は、ほとんどどいていいほどいません。しかし、フランス語と同時にフレミッシュが公用語として認められて以来、国に直属する機関をはじめ軍隊でも大学でも、さらに一般の会社でも、フレミッシュ系の人たちが一躍よい位置を獲得し、かつてのワルーンの支配権独占は過去のこととなりました。

このように社会的に急激に力を増したフレミッシュ系は、現在北部からワルーンを追い出そうとする傾向まで生じています。世界でも古い大学の一つに数えられるカソリックのルーバン大学はこの状況を顕著に示しています。この大学はフレミッシュ領域にあるわけですが、フレミッシュ、フランス語の両国語で授業をしています。ところがフレミッシュ系、フランス語系の対立がはげしく、最近ではフランス語系の学生を追い出す運動が非常にさかんで、このところ毎週のようにワルーン追い出し学生デモがあるという状況なのです。おそらく将来は結局のところフランス語部門は南部に移動せざるを得なくなるだろうというのが、現実のようです。この他に例をあげるとブラッセルでは両国語が公用語になっている関係上、道路指標は全てフランス語とフレミッシュの両方で書か

れています。

ところが車を運転してみると、フランス語のそれが白いペンキでベタリとぬりつぶされているのに出会います。私のよく通る道の指標も例外でなく、ベタリと白くぬられたままでもう六か月以上たちました。書き換える手間はさほど大きいとは思われませんが、こんなに長く放っておかれるのは、関心がないのか、あるいはいくらぬりかえても、すぐまたベタリとやられるかのどちらかに思われます。

国全体を合わせても九州より少し小さいといわれるベルギーがさらに全く異なる言葉をしゃべる二つのグループにわかれていることは、今まで述べてきたので明らかのように、単にコミュニケーションの問題でなく、歴史をさかのぼってさまざまな問題と対立を提起しているようです。これについてはもちろん、皆敏感で、ベルギー人の友だち二、三人一緒に集まる機会があると必ず熱の入った議論になります。

こうした言葉の問題が幼児教育にどのような形で現われているかアニーを例にとつて説明しましょう。アニーは今年四歳になる女の子です。道で行き会うときと走りよつて来て「ボンジュール・マダム」と手を伸ばし握手を求めるほったの丸い元気のいい子です。アニーの両親は共にフレミッシュ系で小学校まではフレ

ミッシュだけです。その後フランス語系の学校にすすみました。現在は家の中でもフランス語が多く、科学者のパパは難しい計算になるとフレミッシュを使うようですが、それ以外はフランス語です。

しかし、アニーのおじいさんおばあさんはフランス語は全然しゃべりません。アニーは他の多くのベルギーの子どもと同じように両親共稼ぎの関係上、小さい時からのおじいさんおばあさんと一緒に過ごすことが多く、その結果、今ではフレミッシュ、フランス語と両方しゃべれます。

ごく最近アニーたちは新しい家に移りました。そこは古い教会を中心とした田舎町で、牛肉や野菜等ブラッセル市内よりかなり安い上に、とても静かな森の豊かなところです。この村のフレミッシュ領域ですから、村の小学校はもちろん、フレミッシュで授業をしています。アニーは今のところ元から通っていたブラッセル市内のフランス語系の幼稚園に行っていますが、小学校の年齢になると両親は学校を選択をしなければならぬようです。

アニーのように両親がフレミッシュで、フランス語系の学校に通う子どもは少なくありませんが、最近ではフレミッシュ系はフレミッシュの学校で、ワルーンはフランス語の学校に強制的に行かせる法律を通そうとする運動が起きています。

(在ベルギー)